

# 掛川市立第一小学校所蔵の「沿革誌」と岡田清直

OKADA kiyonao in the unpublished historical records of Kakegawa Dai-1 Elementary School

小栗 勝也\*

Katsuya OGURI

## 1、はじめに

用行義塾は学制が發布される直前の明治5年6月、久津部村(現・袋井市)に作られた同地域初の小学校であり、同校の教師の1人であったのが岡田清直である<sup>(1)</sup>。

その岡田が明治7年に「掛川第一小学校長」になったという情報が、前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団 第三編』(私家版、平成9年10月31日)に記されている。しかし、前田氏が、何を根拠として、その情報を記したのかは不明である。前田氏が上記著書『駿遠へ移住した徳川家臣団』全5巻を執筆するに当たり、氏が参考にした文献の全てを筆者は再調査したが、どこにも岡田の校長就任の記録は掲載されていなかった<sup>(2)</sup>。

ところが、以前、全く別の事を調べる必要から筆者が閲覧していた『静岡県の学校』(静岡県出版文化会編、昭和62年11月25日、静岡教育出版社)の中で、「掛川市立第一小学校」の紹介頁(553頁)にある「歴代校長」の中に、第2代校長として岡田清直(就任は明治7年)の名が記載されていることを知った。その事は既に拙稿で紹介した通りである<sup>(3)</sup>。筆者が現時点で承知している限り、前田氏の本以外で、岡田清直が掛川の小学校で校長をしていたことを記す文献は他に存在しない。そのため、もしかすると前田氏もこの書を見て記したのではないかと想像される。但し、前田氏は自著の中で、この本を参考文献として記してはいない。

この学校が明治6年に開校した時の正式名称は「掛川学校」であり、校名に「第一」の名が入るようになったのは昭和16年以降である。そのことは『静岡県の学校』の掲載頁中にある「沿革」という名の略年表からも容易に判る。従って明治7年に「掛川第一小学校」という学校は存在しないので、存在しない学校の校長に岡田が就任することもない。しかし、前田氏は略年表を見ていなかったのか、掛川学校と掛川「第一」小学校の区別に気付かず、混同したままの理解で、しかしながら、それでも明治期の掛川は市ではないことは分かっていた為か、「市立」はあり得ない

と考えて「掛川市立第一小学校」の名から「市立」の2文字だけを削除して「掛川第一小学校」と記したのではないか、というのが筆者の想像である。

前田氏は参考文献として記さなかったけれども『静岡県の学校』を見たのではないかという想像と、年表を見ずに学校名を誤記したという想像の2つが仮に正しければ、明治7年に存在しないはずの「掛川第一小学校」の「長」として岡田が就任したという情報を前田氏が記入した理由は理解できる。但し、筆者の想像が正しいか否かは分からない。しかし、不正確な記録や誤記を頻繁に行っているという前田氏の特徴から考えると、筆者の想像は外れていないのではないかと考えている。

ところで、本稿で問題にしたいことは、前田氏の仕事の質を問うことではなく、『静岡県の学校』に記載されている通り、後に掛川市立第一小学校となる小学校に明治7年、岡田清直が校長を務めていたという情報が事実であるかどうかを検証することにある。

この情報は、前田氏の本と『静岡県の学校』の2つ以外には記されておらず、前田氏の本では出典情報が不明であり根拠が分からないが、岡田の校長就任が記入されているが、それは『静岡県の学校』を前田氏が見たからではないかと想像されることは上述した通りである。

それでは『静岡県の学校』は何を根拠にして、岡田の校長就任の情報を記したのであろうか。この本は、編集部が昭和62年5月に、県下の公立小・中学校及び特殊学校の全826校に対して原稿の執筆を依頼し、上がってきた原稿をまとめたものであるから<sup>(4)</sup>、岡田清直を含む校長の情報を記したのは当時の掛川市立第一小学校ということになる。では、同校は何を基にして、その情報を原稿にしたのであろうか。

かつて筆者は、袋井東小学校に保存されている同校の『沿革誌』、及び同校のPTAが独自にまとめた校史を調査したことがあり、そこには掛川市立第一小学校と同様に厳密とは言えない情報ではあるものの歴代校長のリストがあった<sup>(5)</sup>ので、その経験から、同様のリストが掛川市

立第一小学校にも残っている可能性があるのではないかと、それを見れば、依頼された原稿の執筆も可能ではないかと想像した。

そこで筆者は、直接、掛川市立第一小学校に問い合わせるのが一番の近道であると考え、同校に照会の手紙を送った(2022年11月30日)。すると12月6日にメールで同校の杉浦雅美校長より小栗に返信があり、「沿革誌」の中に岡田の名があること、その文書を見て頂いて構わないこと、掛川市教育委員会にも承諾を得ていること、但し小栗から教育委員会に対して調査したい旨の依頼状を別途送付して欲しいこと、が記されていた。早速、指示された通りのことを実行し、筆者と杉浦校長先生が面談できる日時を調整した上で、12月15日午前に同校を訪問し、文書を見せて頂いた。予め杉浦先生は校長室の机の上に『沿革誌』を並べ、岡田の名が記されている箇所を見開きにして、待っていて下さった。

## 2、文書から判明した情報

### (2-1) 同校に残る沿革誌について

同校に保存されている文書は幾つもあったが、その中で最もまとまって残っていたのが、杉浦先生が用意して下さっていたものである。手書きの文書で、厚紙の表紙の中央に、「静岡県小笠郡掛川町立掛川女子<sup>尋常高等</sup>小学校沿革誌」(原文縦書き、一部分かち書き)と全ての冊子に記されていた(以下『掛川女子小学校沿革誌』と略す)。このシリーズが全部で11冊存在していた。表題の「沿革誌」の下には、各冊ごとに、「第壹(壹に同じ…小栗注)」「第二」のように巻号に相当するものが記されている。但し、「第壹」のみは「甲ノ部」と「乙ノ部」の2冊に分かれている。また、すべての表紙の右肩部分には、朱で捺印された「永久保存」の文字があり、なおかつ、そのすぐ左に「第壹類 壹ノ一」のように朱書きで記されていて、それは「第壹類 壹ノ一〇」まで続き、最後の11冊目のみ「第壹類壹 号外」と記されている。その朱書き部分は、『沿革誌 第壹 甲ノ部』が「第壹類 壹ノ一」で、『沿革誌 第壹 乙ノ部』が「第壹類 壹ノ二」になっているので、『沿革誌 第二』は「第壹類 壹ノ三」となり、これ以降は数字が1つずつ、巻数の数とずれた形になっている。なお、5冊目に相当する冊子のみは表紙が欠落しているので、これらの文字を確認することはできない。

なお、同校の保管庫には、上の沿革誌以外の古い沿革誌も数個存在していたが、それらはいずれも体系的なものではなく、一部分のみが残されたような形のもので、他は散在してしまっているようであった。それらも全て見せて頂いたが、そこには明治初期の情報は少なく、また、岡田清直の文字はどこにも記されていないかった。

そこで、重要なものは『掛川女子小学校沿革誌』のみと

その場で判断し、筆者は校長先生の許可を得て11冊全てを借り受けることにした。その文書は筆者の大学の研究室に運び、そこから外に出すことはないという約束した上で、丁寧に中の記録を調べることにした。

まず、この文書を見た時に、掛川市立第一小学校に残っているのも、同校の沿革誌であるのは間違いは必ずであるが、なぜ「女子」小学校の名で作られているのかという疑問が浮かんできた。その場で、杉浦先生にも尋ねたのだが、先生も理由が分からず疑問であるということであった。もし、掛川学校や第一小学校と関係ない女子学校の沿革誌であったとしたら、これを調査しても意味がないことになる。そこで、手始めに、女子小学校の名称に関する疑問を解明することから着手することにした。

すると幸いにも、すぐにその答えは見つかった。『掛川女子小学校沿革誌 第二』(第一類 壹ノ三)の中にある「三 学校ノ名称資格」の中に以下の記述があった。すなわち、もともと明治6年からスタートした「掛川学校」が、明治31年9月の「小学校組織変更」により、「男女両小学校ノ設立トナリ」、「掛川町立掛川女子尋常高等小学校ト称ス」ことになった、というのである。

掛川市立第一小学校の最初の母体である「掛川学校」が、途中から男子の小学校と女子の小学校に分かれ、女子の小学校の名称が「掛川女子尋常高等小学校」であった訳である。この女子小学校はその後、明治34年に裁縫学校が「附設」され、36年に裁縫学校が「掛川女学校」と改称され、更に41年には「町立女子技芸学校」となり、大正2年に「廃校」となっていることも、同じ記録から判明する。

女子技芸学校は廃校になるまで一貫して掛川女子小学校の附設の学校であるから、女子小学校は別にそのまま存続していたことになる。ちなみに、附設の女子技芸学校は大正2年に「掛川町立掛川実科女学校」として生まれ変わっているが、この実家女学校を母体とするのが後の掛川東高校である<sup>(6)</sup>。

掛川市立第一小学校に残る沿革誌が『掛川女子小学校沿革誌』である理由は、最初の掛川学校から始まる後身学校の中に、「掛川女子小学校」があったためであり、掛川女子小学校の時代に、この沿革誌が作成されたと考えれば、表題が女子小学校の名になっていることも理解できる。逆に、それ以外の理由は考えられない。従って、この沿革誌一式は、どんなに古くても、掛川女子尋常高等小学校の名前に変更された明治31年以降のどこかで作られたことになる。この文書にある記録がどんなに新しくても大正2年までなので、恐らくは大正2年か3年初め頃に書かれた文書であると推定できる。

以上で、筆者と校長先生が疑問に感じたことの答えを示したことになると思う。同時に、この沿革誌が作られた大凡の時期も判明した。

しかし、ここで不思議な点があることを改めて指摘しなければならない。掛川学校が途中で男女別々の小学校にな

ったのならば、男子の小学校もあったはずである。わざわざ「男子小学校」と名乗らなかったかもしれないが、男子用の「掛川学校」または「掛川小学校」が存在していたはずだが、その学校はどうなったのであろうか。そのヒントが、同じ『掛川女子小学校沿革誌 第二』の「三 学校ノ名称資格」の次に置かれた「四 校舎及校地」の記述中にあった。すなわち、明治31年に掛川町は「男女両小学校ノ制」となったので、「本校ノ北建物四十八坪ヲ割テ男子小学校内へ移築ス」とある。

移築した先が男子小学校なので、この文にある「本校」は掛川女子小学校のことになる。従って、男女別々に分かれる前にあった元々の掛川学校の校舎は女子小学校の方に引き継がれたことになる。では、男子校はどこに移ったのか、また、男子の学校の沿革誌はなぜ残っていないのか、更には、女子小学校はなくなって、いまの第一小学校になったはずだが、いつどこで女子と男子の学校が合体したのか、というような疑問が次々に生じる。それらの答えは、女子小学校の沿革誌には、当然のことながら、どこにも記されておらず、謎のままである。

その代わりに、女子小学校の生徒が増加したために明治36年に増築された新校舎の部分が、大正2年4月に町立実科高等女学校の校舎として充当され、それ以外にも校舎を新築して教室を増やして実科高等女学校の校舎になったことが記されていた。先述の通り、実科高等女学校は現在の掛川東高校の最初の学校のことである。今でも東高の創立時は、実科高等女学校の創立時であると自称している。それがスタートしたときの教室の多くは、掛川女子小学校の増築部分であったことが分かる。掛川女子小学校の敷地内で掛川東高校が生まれたとも言える。

ところで、筆者の目的は岡田清直の情報を探すことであり、それとは直接関係のない掛川学校及びその後身学校、掛川東高校の歴史について詳しく解明したい訳ではない。そのため本稿では、この程度の議論で筆を留めておくことにしたい。

## (2-2) 岡田清直の記録

さて、『掛川女子小学校沿革誌』全11冊を調べた結果、岡田清直の記録が存在したのは、表1に示す通り、全部で4箇所であった。

このうち①は、同沿革誌の中の最初にある「一 学校設置区域」の項目の冒頭に、掛川学校が設置された当時の学区取締の一覧表が置かれていて、その中に第三中学区・一番小学区の学区取締として岡田清直の名が記載されている、というものである。岡田だけで

なく、二番小学区の本間賢蔵から七番小学区の川村八郎次まで、岡田を入れて全部で7名の学区取締が記されている。情報としては、それだけである。

この学区取締の情報は、既に筆者が「足立貫一・岡田清直と学区取締に関する新資料」として『静岡理科大学紀要』第26巻(2018年12月20日)に発表した文書の中にある情報と同一である。また、岡田が学区取締であったことは公刊資料である『静岡県史 資料編16』<sup>(7)</sup>にも記載があり、既知の事実には過ぎない。

また④についても、明治6年4月1日に学区取締が7名申し渡されたという記録で、ここでは小学区の区別はなしに名前のみが列記されており、そこに岡田清直の名がある、というだけのものである。この記録の価値は①と同じである。

③は、「三 寄附物件」の項目の筆頭に、明治6年(月日は不明…小栗注)に岡田清直によって「學問の勸め 拾部、智恵の環 三部」の「代価」が寄附されたことが記されている、というだけのものである。福沢諭吉の『学問のすすめ』は、当時は今日のような本としてではなく、1編ずつの冊子として出回っていたが、明治6年は12月に三編が発行されたばかりの頃となる。全部で10部のみの購入なので、有名な初編のみをまとめて10部購入したのかもしれないし、初編と二編(三編は年末に発行なので含まれない可能性が高い)を購入したのかもしれないが、具体的なことは分からない。いま一つの『智恵の環』については、当時の綴字の教科書としても取り上げられていた古川正雄の『絵入智慧ノ環』<sup>(8)</sup>のことだと思われるが、別に於兎子による『啓蒙智慧之環』も存在し<sup>(9)</sup>、どちらであるかは上の情報だけでは区別ができない。いずれにしても、本の寄附の情報だけであり、ここでも岡田に関する詳しい情報は何もなかった。

最後に②についてだが、ここには重要な情報が含まれているので、紙数を割いて詳述しておきたい。この中にある「学校職員ノ任免」の箇所に、写真1のような記録がある。文書の実物は罫紙を山折にして綴じたものであるが、写真の右側部分は、それを広げた場合に「任免」の1枚目にあたる1丁目の左側の箇所にあり、写真左側部分は4丁目の右側部分の箇所になる。

ここから、岡田清直が掛川学校の訓導として赴任することを申し付けられたのが明治7年6月7日であるとわかる。依願職務差免になったことを示す左側の画像には「〃」の記号がついているが、これは、これより右側の記録から

表1 岡田清直の記録がある箇所の一覧

| 便宜No. | 文 書 名                    | 掲載情報の概要      |
|-------|--------------------------|--------------|
| ①     | 『掛川女子小学校沿革誌 第二』(第一類 壺ノ三) | 学区取締としての岡田清直 |
| ②     | 『掛川女子小学校沿革誌 第三』(第一類 壺ノ四) | 岡田清直の任免記録    |
| ③     | 『掛川女子小学校沿革誌 第六』(第一類 壺ノ七) | 岡田による本の寄附の記録 |
| ④     | 『掛川女子小学校沿革誌 第七』(第一類 壺ノ八) | 学区取締としての岡田清直 |

明治9年のことであると分かっているの、学校を退いたのは明治9年12月15日であることが分かる。

但し、以上から分かることは、岡田が教員として掛川学校に勤めた時期であって、それが校長としてであるか否かは分からない。

同様に、『静岡県の学校』で初代校長として明治6年に赴任したとされる足立栄造についても、赴任と退任の時期等の情報は、この『掛川女子小学校沿革誌』から知ることができる。写真1右側画像には、岡田が赴任する3週間程前の5月17日に足立が差免になっていることが分かり、足立と岡田が入れ替わりになったことは間違いない。ちなみに、写真1右側画像よりも、もっと右側に位置する1丁目右側の罫紙部分には、任免記録の筆頭として、足立栄造が「明治六年四月 掛川小学校中等教員申付」となったことが記録されている。

次に足立の名が出てくるのが、写真1右側部分にある、明治7年2月25日に「掛川小学校訓導申付」という記録である。足立は中等教員として赴任した1年強後に「訓導」として新たに任命されたことになる。当時、正式な小学校教員の資格である「訓導」の肩書きを得ないまま教員職を務めていた者は多数あり、逆に無資格者を用いることで不足していた教員職を穴埋めするしかないのが実情であった。但し正規の教員である訓導は必ず必要であるので、資

格を取れるレベルの者には、すぐにでも資格を取ることが期待されていた。後に師範学校が整備されてからは、師範学校を卒業することで訓導の資格を得られるようになるが、師範学校がない時代には、それに相当する機関での専門教育を受ける必要があった。たとえば兵庫県では「伝習所」が設けられ、そこで学ぶことが準訓導の資格を得るための条件であった<sup>(10)</sup>。

浜松県の場合、師範学校ができる前に、小学校教員を速成で養成する学校として浜松瞬養学校が設置されている。ここでは僅か4か月の課程を終えて試験に合格すれば訓導の資格が得られた。正に速

成教育である。しかし、それが設置されたのは明治8年3月であり<sup>(11)</sup>、足立や岡田が訓導の資格を得るより後のことである。従って彼らが浜松瞬養学校で資格を得ることはできない。それでは、2人はどのようにして訓導の資格を得たのであろうか。それについては不明のままであるが、彼らの持つ能力から、その資格が十分にあると見做された故なのかもしれない。元々は訓導の資格を有していなかった足立が、それを得たが故に、明治7年になって新しい辞令が出されたものと推定できるが、しかし、それから3ヶ月後には差免されて、岡田と交代したことになる。

ところで、この足立栄造<sup>(12)</sup>についても『掛川女子小学校沿革誌 第三』には「校長」という肩書がどこにも記されていない。

### (2-3) 校長の根拠

掛川市立第一小学校の関係者は、根拠がどこかにあったからこそ、岡田や足立を校長のリストに含めた原稿を記して、『静岡県の学校』編集部に送ることができたはずであるが、『掛川女子小学校沿革誌』では、根拠となる情報を得られなかった。もしかすると、筆者が一瞥しかなかった他の沿革誌、或はその他の文書の中に、根拠となるものが存在していて、筆者はそれを見落としている可能性があるかもしれないと考え、『掛川女子小学校沿革誌』以外の文書を改めて見せてもらうことにした。杉浦校長先生と再び日程を調整し、筆者が2度目の訪問をしたのは2023年1月13日の午前であった。この日も校長先生は関連文書のすべてを保管庫から出して、校長室の広いテーブルの上に並べておいて下さっていた。校長先生も事前に文書を見て下さったようだが、やはり校長の記録は残っていないようです、と教えて下さった。筆者も、改めて文書を1つつ手に取って中を見たが、それらしきものは発見できなかった。ところが、いかにも新しい作りの「学校沿革誌」を見ていたところ、その中に校長一覧のリストが存在し、明治初期の足立栄造、岡田清直の名も記されていることを発見し、校長先生と2人で思わず声をあげてしまった。発見の瞬間の喜びは何度味わっても嬉しいものである。

写真2が発見した箇所である。なお、足立の記録の右側に鉛筆で加筆された部分があり、画像では判読し難いが、ここには「掛川学校長」「沼津兵学寮掛川支寮教授兼任」とある。誰がいつ加筆したものであるかは分からないが、「兼任」という表現は明らかに間違いである。沼津兵学校（兵学寮）は静岡藩が設置したもので、旧徳川勢力が謀反を企む根拠にしかねないことを危惧した明治政府により、政府の兵部省直属とされ、明治5年には沼津から東京へ移転させられている。それにより沼津兵学校（兵学寮）は独立した存在としては消滅しているので、掛川学校が出来た明治6年4月の時点で、足立が掛川支寮教授を兼任することは不可能である。従って正しく表現するなら、兼任で

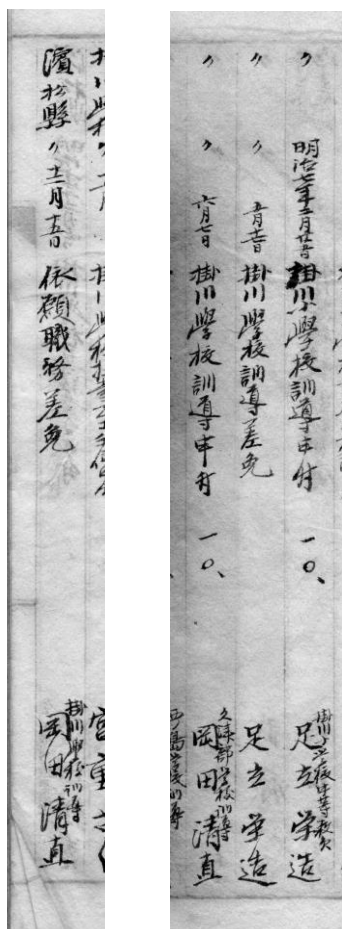


写真1 岡田の任免記録

はなく、元・沼津兵学校（兵学寮）掛川支寮の教授と呼ぶべきである<sup>(13)</sup>。

写真2が収録されているのは、黒の革表紙に金文字で「学校沿革誌」とのみ記された文書である。革表紙を開いた次に置かれた中扉には「学校沿革誌」「学校名」「掛川市立第一小学校」「掛川市教育委員会」の文字が並んでおり、このうち校名のみがペン書きである。教育委員会が用意した沿革誌を記録する汎用の記録簿ということであろう。以下、本稿では、この文書を『掛川市立第一小学校「学校沿革誌」』（略す時は『第一小・学校沿革誌』とする）と呼ぶことにする。

かつて『掛川市史』を見ていた時に、掛川学校のことは『掛川女子小学校沿革誌』の記録と、掛川市立第一小学校「学校沿革誌」の2つを基に執筆されていることを筆者は承知していたが、掛川市立第一小学校「学校沿革誌」という文字が表題に書かれた文書は掛川第一小学校の保管庫になかったため別のものだと思っていた。ところが、中扉の情報を見て、これが『掛川市史』の執筆者が用いた文書であると確信した。また、『掛川市史』の記述では掛川学校の創立年月日を「四月一日」と記した根拠として、掛川市立第一小学校「学校沿革誌」を用いているが<sup>(14)</sup>、杉浦校長先生によれば、その日にちが記されているのは、こ

の『第一小・学校沿革誌』のみである、とのことであった。その点からも、『掛川市史』が用いた文書がこれであることは間違いない。

写真2の記録から、足立栄造と岡田清直の着任・転出日が分かるが、これは写真1にある日付と一致する。足立の着任日は写真1にはないが、前述の通り別の箇所から「明治六年四月」であることが分かっている。そこには「四月」であるとは記されていないが、「写真2には、足立の着任日を4月11日と記されている。11日という日にちが別の情報に基づいているはずである。おそらく、創立日が4月11日なので、それに合わせたのではないかと想像される。

写真2にある両名の着任・転出日が、写真1の情報と一致することから、写真2のリストを記した人は、写真1の『掛川女子小学校沿革誌』の記録を参考にしたと考えられる。しかし既述の通り、『掛川女子小学校沿革誌』の任免記録では「校長」という文字はどこにもない。

『第一小・学校沿革誌』は冒頭に置かれた「記帳責任者」の欄の一番初めに、校長・後藤皓三、記帳責任者・栗田久（杉浦校長によれば教頭が担当）の名が記され、その時の「記帳年月日」は昭和45年3月31日となっている。その時から記録が開始された文書ということになる。ちなみに、冊子を替えて、現在も、同じ形の沿革誌が書き続けられているとのことである。

恐らくは、最初に校長の箇所を記した第一小学校関係者が、『掛川女子小学校沿革誌』の任免記録の最初に出てくる足立栄造のことを教員の筆頭格という意味で、後の言葉でいう校長に相応しいと判断して、校長の欄に足立の名を記したのではないかとと思われる。それゆえ、その足立と入れ替わりのように赴任した岡田を次の校長と判断したのではないかとと思われる。

或は、その頃の掛川の歴史に詳しい人が関与していたとしたら、『掛川市史』にも記されている通り、沼津兵学校掛川支寮の教授であった足立栄造は当該地域の教育者としてはトップクラスとなるから、その人物が掛川学校の最初の教員として記録されているから、教員の長であるに違いない、と判断したのかもしれない。岡田清直については、明治6年に掛川学校が出来た時、同校の学区を担当する学区取締であったから、そのような人物が足立の代わりに教員として掛川学校に赴任したとなれば当然に教員の筆頭格に違いないと判断できたかもしれない。

ただ、その後の教員については、教員筆頭格が誰であるかを判断できるだけの有効な材料がなかったためか、写真2で、岡田が辞めた後の校長職が空白のままになっている。岡田の後にも、足立や岡田を校長と見なすなら、それに相当する人は、その後もずっと存在し続けたはずなのに、次に来るのは明治16年の蜷川になってしまうのである。

また、この不思議な校長の並び順は、『静岡県の学校』に掛川第一小学校の歴代校長の並び順と等しいことが一

| 校（園）長        |     |           |           |              | 教 頭〔主任〕      |                        |           |           |              |
|--------------|-----|-----------|-----------|--------------|--------------|------------------------|-----------|-----------|--------------|
| 前任校名<br>(職名) | 氏 名 | 着任<br>年月日 | 転出<br>年月日 | 転出先<br>(通 職) | 前任校名<br>(職名) | 氏 名                    | 着任<br>年月日 | 転出<br>年月日 | 転出先<br>(通 職) |
| 明 6          | ( ) | 足立栄造      | 明治 6.4.11 | 明治 7.6.17    | ( )          | 掛川中学校<br>沼津兵学校<br>掛川支寮 |           |           |              |
| 7            | ( ) | 岡田清直      | 明治 7.6.7  | 明治 8.12.15   | ( )          |                        |           |           |              |
| 8            | ( ) |           |           |              | ( )          |                        |           |           |              |
| 9            |     |           |           |              |              |                        |           |           |              |
| 10           |     |           |           |              |              |                        |           |           |              |
| 11           |     |           |           |              |              |                        |           |           |              |
| 12           |     |           |           |              |              |                        |           |           |              |
| 13           |     |           |           |              |              |                        |           |           |              |
| 14           |     |           |           |              |              |                        |           |           |              |
| 15           |     |           |           |              |              |                        |           |           |              |
| 16           |     | 蜷川親善      | 明治 28.7.2 | 明治 29.7.2    |              | 掛川市立第一小学校              |           |           |              |
| 17           |     | ・         |           |              |              |                        |           |           |              |
| 18           |     | ・         |           |              |              |                        |           |           |              |
| 19           |     | ・         |           |              |              |                        |           |           |              |
| 20           |     | ・         |           |              |              |                        |           |           |              |
| 21           |     | ・         |           |              |              |                        |           |           |              |
| 22           |     | ・         |           |              |              |                        |           |           |              |
| 23           |     | ・         |           |              |              |                        |           |           |              |
| 24           |     | 平井 脩      |           |              |              |                        |           |           |              |
| 25           |     | 西尾林道      |           |              |              |                        |           |           |              |
| 26           |     | ・         |           |              |              |                        |           |           |              |
| 27           |     | ・         |           |              |              |                        |           |           |              |
| 28           |     | ・         |           |              |              |                        |           |           |              |
| 29           |     | ・         |           |              |              |                        |           |           |              |
| 30           |     | ・         |           |              |              |                        |           |           |              |

目で分かる。『静岡県の学校』のために原稿を書いた人は、間違いなく『第一小・学校沿革誌』のこの校長リストを用いていると断定できる。以上のことから、『静岡県の学校』の掛川市立第一小学校の項目に登場する歴代校長のリストが何を根拠に作成されたかのかについては証明ができた。

但し、岡田の次の校長が蜷川になっていることに関する不思議は解消できていない。『静岡県の学校』の記録では次の第3代校長は蜷川親善で、彼が赴任したのは明治16年となっているので、蜷川が第3代校長として来るまでの10年近くもの長期間、岡田が第2代校長を続けていたことになってしまう。しかし岡田は明治9年末には掛川学校を退職している。その後、『掛川女子小学校沿革誌 第三』中の「学校職員ノ任免」の記録には岡田清直の名は一切登場していない。前田氏の本でも、岡田は明治11年に死去したことになるので、それが正しければ、16年に校長が交代するまで、岡田が第2代校長であり続けられるはずはない。従って、『静岡県の学校』に記された「歴代校長」の記録、及び、『第一小・学校沿革誌』にある写真2の情報は間違っていることになる。なぜ間違ってしまったのかは筆者には分からない。

#### (2-4) 文部省の記録との齟齬

ところで、『大日本帝国文部省年報、第2(明治7)』(国立国会図書館デジタルコレクション)によれば、第十三中学区の掛川宿に設置された掛川学校の「主者」は「北村秀房」と記されている。主者というのは、今日で言えば校長に相当するように思ってしまうが、この北村の名は、『静岡県の学校』に収録の掛川市立第一小学校の歴代校長の中に存在していない。この文部省年報は明治7年の情報が記されているから、発行はそれより後の明治8年以降であることは間違いないが<sup>(15)</sup>、もし「主者」を校長と解釈してよいのなら、明治7年のどこかの時点で掛川学校の校長は岡田清直から北村に校長職が異動したということになる。

しかしながら、「主者」を校長ではなく、例えば学区取締のような教育行政者であると解釈するならば、話は別になる。例えば、用行義塾も久津部学校も、「主」は足立儀八と文部省の記録に記されているけれども、足立儀八は学区取締ではあっても、教員であったという記録は今の所どこでも発見されていない。用行義塾では特に、明治5年時の教員の出勤簿が残されているが、そこに足立儀八の名はない。教員と学校管理者は別という扱いであったとしたら、掛川学校の「主者」であった北村も、教員ではないと解釈するのが自然に思えてくる。

どちらの解釈が正しいのかについては、次に示す根拠から明確な解答ができる。すなわち、『掛川女子小学校沿革誌 第三』(第一類 壱ノ四)にある教員の任免記録を見

ると、北村の名はどこにも存在しないのである。従って、明治7年の掛川学校の「主者」である北村秀房は掛川学校の教員ではなかったと断定できる。北村は、足立儀八のような教育関連の役人として掛川学校の「主者」に置かれていただけなのではないかと想像される(但し、北村が学務取締であったか否かは確認できる証拠がない)。今日の校長は教員経験者で教員を代表できる管理職であって、純粋な役人とは異なるが、すくなくとも、当時の文部省に登録された「主者」は、今日の校長とは異なり、役人のような扱いであったと考えるのが妥当であろう。それゆえ、明治初期の「校長」を、役人としての「主者」と考えるのか、今日のような教員の筆頭でもある存在と考えるのかによって、誰を校長と呼ぶべきなのかは、微妙な問題が含まれていることになる。いずれにせよ、当時においては校長という名称も使われていないので、今日と同列に考えるのは危険であると言える。

ただ、『掛川女子小学校沿革誌 第三』(第一類 壱ノ四)の教員任免記録の最初に記された「明治六年四月 掛川小学校中等教員申付 足立栄造」の記録は、筆頭に置かれたという意味で、間違いなく当時の教員筆頭格と考えてよいであろう。足立の経歴からしても、そう言える。それを今日風に「校長」と解釈した結果が、『静岡県の学校』の記録に初代校長と記された理由であったのかもしれない。

#### 3、岡田清直に関する新発見

ところで写真1の右側画像では、岡田清直の肩の部分に「久津部学校訓導」と記されている。これを見た瞬間に筆者は、掛川市立第一小学校に足を運んだ甲斐があったと、心中、大喜びをした。校長先生にも、そう伝えた。これまで誰にも知られていない新たな事実を発見したことになるからである。この喜びは、用行義塾の研究を始めて何度か経験してきたが、久しぶりに同じ経験を積み重ねることができて嬉しい限りである。第3者から見ると、取るに足らない瑣末な事柄かもしれないが、それでも、この小さな事実はいま世界で始めて私が見つけ、私だけがその価値を知っているのだ、という思いは、研究者にとっては何ものにも替え難い程の喜びなのである。考古学者が砂漠の中から遺物を見つけたり、恐竜学者が化石の中から新種の恐竜の骨を見つけたり、天文学者が新しい天体を発見したりしたときも同じ気持ちなのではないかと思う。

さて、今回の発見で、岡田が久津部学校の教員であったことが初めて判明したわけであるが、そのことの価値について3つの点から説明したい。

第1は、これまで分からないままであった事実が判明したという意味で新発見であり、従って大きな意味があるという点である。創立時の久津部学校の教員が誰であったのかという問題は、これまで全くの謎でしかなかった。明治

7年の情報ではあるが、当時の久津部学校の教員として文部省に届けられていた教員は男性2名だけであり<sup>(16)</sup>、恐らくは1年前の創立時も同じ程度でしかなかったと思われる。仮に明治6年においても久津部学校の教員は2名であったとしたら、その内の1人が岡田清直であったことになる。そのことが、今回の発見で初めて判明したのである。

第2に、今回の発見は、用行義塾と久津部学校の連続性を証明する上で、新しい材料を提供してくれたことになる点でも価値がある。久津部学校は文部省の学制に沿った明治期の普通の小学校であるが、用行義塾の後身でもあり、両校には幾つかの共通項があった。たとえば、用行義塾は明治5年6月に開校した時、教場が1つだけの新築の「学堂」を校舎としてスタートしたが、その校舎はそのまま久津部学校に引き継がれていた<sup>(17)</sup>。また、用行義塾の「学校主」として文部省に届けられていたのは、足立儀八であるが、久津部学校の「主者」として文部省に届けられていた者も足立儀八であった<sup>(18)</sup>。校舎から見ても、学校の「主」から見ても、用行義塾と久津部学校は連続性が見られるということである。

そのことは既に筆者が論文にして発表している通りである<sup>(19)</sup>。それに加えて今回の発見により、教員としても、用行義塾で教員であった岡田清直が、そのまま久津部学校の教員になっていたことが明らかになり、教員レベルでも連続性があったことになる。

このような連続性から分かる通り、後の学校に応用可能な学校として用行義塾が先に存在していたので、久津部地域では政府が求める小学校を開設するにあたっては他地域よりも比較的容易に準備ができたのではないかと想像される。教師の連続性も、その証拠になるであろう。

第3に、岡田個人に注目してみると別の着眼点から指摘すべき事柄が浮かび上がってくる。久津部学校は明治6年6月10日が創立の日<sup>(20)</sup>であるから、仮にその時から岡田が久津部学校の教師であったとしても、ほぼ1年後の明治7年6月7日に掛川学校に異動したので、岡田が久津部学校の教員であったのは最初期の1年程でしかなかったことになる。

掛川学校から見た場合、岡田がそこへ赴任した明治7年は学校の創立から1年後のことになる。当時の掛川の事情を想像してみると、開設したばかりの自身の小学校を首尾よく運営していくためには、他地域に教員を送り出せるほど余裕がなかったのかもしれない。だから、掛川に居住する岡田には、掛川の学校で教育をして欲しかったのではなかろうか。それゆえ、1年ほど後に掛川学校の教員として岡田が招聘されたのかもしれない。

換言すれば、久津部でも掛川でも必要とされた岡田は、当時の当該地域においては教育者として貴重な人材であったということになろう。あくまでも推測の話ではあるが、岡田個人を評価する場合の材料として、上のことは指摘し

ておいてよい事柄だと思う。

#### 4、おわりに

今回、『静岡県の学校』の情報を検証したいという思いから、掛川市立第一小学校に連絡を取り、校長の杉浦先生及び掛川市教育委員会の理解と協力の下、同校に所蔵されている古い文書を見せて頂く機会を得た。参考になった情報は多くはないが、岡田清直が久津部学校の教員であった事実を初めて知ることができ、筆者にとっては望外の喜びを抱く瞬間もあった。関係各位に御礼申し上げる次第である。(2023年2月28日、入院前日に脱稿)

- (1) 用行義塾が袋井市と周辺地域における初の小学校である点については拙稿「用行義塾と福沢諭吉」(『静岡理科大学紀要』第22巻、2014年6月1日)を、また、岡田については拙稿「用行義塾の教師・岡田先生について」(袋井市教育委員会・袋井市文化協会・編修発行『文芸袋井』第12号、平成30年3月1日、所収)を参照のこと。
- (2) 現在、筆者が逐次、本紀要に発表中の『駿遠へ移住した徳川家臣団』における岡田清直・岡田錠次郎の謎を参照のこと。
- (3) 拙稿「足立貫一・岡田清直と学区取締に関する新資料」(『静岡理科大学紀要』第26巻、2018年12月20日)71頁。
- (4) 同書の目次裏に置かれた編集部による記事を参照。
- (5) 前掲・拙稿「用行義塾に関する未公開資料「沿革誌」について(その1)」の「(2-2)1セット目の『沿革誌』の特徴」参照。
- (6) 掛川東高校HPにある「校長挨拶」より。  
<https://kakegawahigashi-h.ed.jp/%e6%a0%a1%e9%95%b7%e6%8c%a8%e6%8b%b6/>
- (7) 拙稿『駿遠へ移住した徳川家臣団』における岡田清直・岡田錠次郎の謎(その3)(『静岡理科大学紀要』第29巻、2021年8月31日、所収)70頁を参照のこと。
- (8) 府川源一郎「明治初期国語教科書の検討 一福沢諭吉・古川正雄・松川半山の仕事一」(『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』116回、2009年5月30日、所収)152頁に、「国語教育の分野で、「学制」に先行して作られた教科書としては、『ちゑのいとぐち』と『絵入智慧ノ環』を挙げることができる。福沢諭吉の『啓蒙手習之文』よりも、刊行時期は早い。この二冊は「小学教則」では「綴字」の教科書として取り上げられている。／著者は、古川正雄(節蔵)、改名前は、岡本周吉。福沢諭吉の早くからの弟子であり、慶應義塾初代塾長でもある。」と記されている(小栗注・「／」は小栗が入れたもので、改行を意味する)。『絵入智慧ノ環』の実物は国会図書館デジタルコレクション(WEB)で閲覧できる。
- (9) これの実物は早稲田大学の古典籍総合データベースで関

覧できる。

岡理科大学紀要』第24巻、2017年1月31日）58頁。

(10) 以上、宮川秀一「明治前期の小学教員 ―とくに補助員・授業生について―」（『大手前女子大学論集』第19巻、1985年11月20日、所収）参照。

(11) 浜松市立中央図書館／浜松市文化遺産デジタルアーカイブにあるWEB版の『浜松市史 三』第二章第三節第二項を参照。

(12) なお足立については、これ以外の事柄で既に判明している情報もある。彼は、静岡藩が建てられた明治初めに、静岡藩士の子弟を教育するために掛川城内に設置された沼津兵学校掛川支寮（または静岡藩時代の掛川の学校）の教授の一人であり、また明治6年2月に浜松県から学区取締が任命された際の1人でもあった。掛川学校を離れた後は、現在の袋井市の一部に当たる宇刈村に初めて学校が出来た時（久能学校宇刈分校、または同分校から独立して作られた宇刈村学校のどちらか）、同村で最初の教師を務め、更にその後、可睡斎に設置された遠陽学校の校長にもなっている。以上の情報は、掛川市史編纂委員会編『掛川市史 下巻』（平成4年3月30日、掛川市）及び、前掲・拙稿「足立貫一・岡田清直と学区取締に関する新資料」を参照されたい。彼が、教育に造詣が深い人物であったことは間違いないが、それ以上の人物像は不明である。また、静岡藩士の子弟を教育する立場にあった足立自身が幕臣であったか否かについても定かではない。

(13) 沼津兵学校のことは樋口雄彦『沼津兵学校の研究』（2007年10月10日、吉川弘文館）が最も詳しい。

(14) 注（12）掲載の『掛川市史 下巻』284頁。

(15) 国立国会図書館デジタルコレクションにある『大日本帝国文部省年報、第2（明治7）』（但し原物の表紙は「文部省第二年報 明治七年」と記されている。左は国会図書館での登録タイトル）の7コマ目の画像左（7頁）に、目次の後に前書きのような文章が掲載されているが、その末尾に、「明治八年十二月文部大輔田中不二麿呂謹奏」とある。従って、これが出版された時期は、どんなに早くても明治8年12月であると言える。

(16) 拙稿「2つの用行義塾と創設者たち」（『静岡理科大学紀要』第25巻、2018年1月31日）43頁参照。この稿で明治7年のデータの根拠として用いた資料は国会図書館デジタルコレクションで公開されている『日本帝国文部省年報、第2（明治7年）』であるが、既述の通り、これが作られたのは明治8年であり、掲載内容は明治7年の出来事なので、久津部学校のデータも明治7年の情報になっている。

(17) 拙稿「用行義塾の場所と建物について」（『静岡理科大学紀要』第24巻、2017年1月31日）16頁。

(18) 注（16）掲載の拙稿「2つの用行義塾と創設者たち」43頁。

(19) 注（17）（18）で示した拙稿を参照のこと。

(20) 拙稿「袋井東小学校の年表掲載情報に関する考察」（『静